いずれ最強の錬金術師？

SOMEDAY WILL I BE THE GREATEST ALCHEMIST?

14

小狐丸
KOGITSUNEMARU

登場人物紹介
CHARACTERS
バール
肉塊の大樹から生まれた邪精霊の御子。
アカネ
地球から召喚された勇者の一人。アイドル並みに可愛い。
レーヴァ
狐獣人の女の子。獣人には珍しく魔法の適性がある。
カエデ
アラクネという厄災クラスの魔物。タクミに懐いている。
ソフィア
タクミの護衛を務めるエルフの剣士。タクミの奥さんの一人。
タクミ
ちょっぴり臆病な本作の主人公。剣と魔法の異世界に転生したが、喧嘩もしたことがないので生産職を究めようと決意する。

1　強襲聖域軍団

大精霊達から邪精霊のカケラが原因でシドニア辺境の街に魔物が溢れ出したと聞いた僕――タクミ。

先行して聖域で合流したユグル王国の騎士団の一部隊を陸戦艇ごとガルーダに搭載して、僕達は飛び立った。

「目的地はサマンドール王国側の旧シドニア神皇国領ですかな？」

「はい。先の戦いで敗北したシドニアの住民の多くがロマリア王国やサマンドール王国に流民となって、人口が激減したのは知っていますが、それでもそこで暮らす人がいるはずですから」

僕は共にサラマンダーに乗り込んだ聖域騎士団の団長、ガラハットさんに答えた。

シルフの話では、旧シドニア国内では魔物による大虐殺が行われているという。一刻も早く住民を保護する必要があった。

通信の魔導具で、バーキラ王国の近衛騎士団団長ギルフォードさんと連絡を取った。

現在、ロマリア王国の騎士団と魔法師団、それと冒険者が国境付近で魔物の討伐と避難民の救助をしているらしい。

バーキラ王国からの援軍が到着次第、シドニア国内に前線を押し返すそうだ。その後方支援と国

境付近の防衛をユグル王国からの援軍が担うと聞いている。
二機のサンダーボルトとウラノス、ガルーダが編隊を組んで飛ぶ。ガルーダサイズの飛行物体など見た事がない人がほとんどなので、出来れば姿を消して飛行したかったんだけど、救援に来た事を示さないといけないため、ある程度目立つのは仕方ない。
空を見上げてパニックになる人もいたが、大きな騒ぎにはならなかったようだ。
一番スピードの遅いガルーダに合わせた編隊でも、サマンドール王国と旧シドニアの国境付近に到着するのにそれほど時間はかからなかった。
「ヒャッホーウ!!」
飛行タイプの魔物があっという間に駆逐されていく。
その中で奇声を上げながら空を縦横無尽に飛び回り、魔物を殲滅しているのはドラゴンフライを操縦する狐獣人の女の子レーヴァだ。
先ほど小型の高機動型戦闘機ドラゴンフライに乗り込み、テンション高く飛び出していったんだ。
「タクミ様、一時の方向に平坦な広いスペースを確認。避難者の姿は確認出来ません。魔物だけです」
「よし、サンダーボルト二機に拠点確保の指示をお願い。僕達はレーヴァと飛行タイプの魔物を駆逐後合流する」
僕の言葉に従ってソフィアが二機のサンダーボルトに指示を伝えると、サンダーボルトは降下しながら地表に向けて攻撃をばらまき、周辺の魔物を殲滅していく。
ドドドドドドドドドドドドッーーーー!!
空気を震わすサンダーボルトからの攻撃。
それにより、魔物達は原型すらとどめていない。
ガルーダからも避難する人を助けるための援護射撃が行われ、周辺空域の飛行タイプの魔物を殲滅したレーヴァのドラゴンフライと僕達のウラノスも上空から地上の魔物を攻撃する。
二機のサンダーボルトが急降下して着陸するとハッチが開き、強襲部隊と工兵部隊、ゴーレムが展開する。
八十メートル×二百メートルの四隅に魔導具が設置され、直ぐさま起動する。
魔導具により地面のデコボコは平らになり、表面が硬化すると簡易な滑走路が完成した。
そこにガルーダが降下し着陸すると、格納庫ハッチが開き、陸戦艇サラマンダーが次々と出てくる。
聖域騎士団のサラマンダーと、一台はユグル王国のサラマンダーだ。
ガルーダの離着陸からの部隊展開訓練は平時から行っているので、とてもスムーズだ。
サラマンダーが旧シドニア側に展開して、中から騎士団と魔法師団が出てくると、ガラハットさんが次々に指示を出し始める。
「陸戦艇サラマンダー一号艇は既にサマンドール王国側に入り込んだ魔物の討伐及び、避難民の救助を行え！　工兵部隊は陣地の構築！　サンダーボルト二機は、ロマリア王国方向の空域に存在す

る飛行タイプの魔物を殲滅せよ！」
ガラハットさんの号令で、陸戦艇サラマンダー一台がサマンドール王国方向へと走り、サンダーボルト二機が再び飛び立つ。
ユグル王国のサラマンダーもサマンドール王国側に入り込んだ魔物の討伐をするようだ。
僕達の乗るウラノスとレーヴァの乗るドラゴンフライは、旧シドニアの外周を回りながら、飛行タイプの魔物を殲滅する事にした。
幸いなのは、ワイバーンクラスの魔物がいない事か。
魔物を探して飛び立つサンダーボルトとは反対方向に僕達は高速で飛行する。
ウラノスとドラゴンフライの二機なら、旧シドニア神皇国を一回りするのに、それほど時間はかからない。
他の国に比べ、旧シドニアの面積が狭いというのもある。
『タクミ様、レーヴァはお先に行かせてもらうであります！』
「無茶するなよ！」
『了解であります！』
通信が切れると、ドラゴンフライが加速してあっという間に見えなくなる。
僕がレーヴァが撃ち漏らした魔物を倒しながら、地表へも攻撃して飛んでいると、反対回りしていた二機のサンダーボルトがもう前方に見えてきた。
僕は直ぐに通信の魔導具を取る。

「こちらウラノス。周辺空域の魔物の討伐は完了。サンダーボルトは地上の魔物を上空から討伐してください。くれぐれも避難民に気を付けてください」
『『了解です！』』
対地攻撃能力の高いサンダーボルトには、地上の魔物を間引いてもらう。
次にレーヴァに通信を入れる。
「レーヴァ、飛行タイプの魔物を殲滅後、僕達に合流してくれ。僕達はガルーダ周辺の魔物を討伐しながら遊撃する」
『了解であります！』
その後、ウラノスの針路を簡易滑走路へと向けた。

2　タクミ、惨状を目にする

着陸したウラノスから人魚族のフルーナや有翼人族のベールクトを含む僕達のパーティーメンバーが降り立つ。
僕はウラノスをアイテムボックスに収納すると、矢継ぎ早に指示を出すガラハットさんのもとへ走る。
「ガラハットさん！」

「おお！　イルマ殿、飛行タイプの魔物討伐ご苦労様ですぞ」
「はい。これから、僕達は遊撃部隊として避難民の救助をしながら魔物の数を減らします」
「儂らはサマンドール王国側に侵入した魔物を討伐後、前線を押し上げますぞ」
「お願いします！」
「ご武運を！」
ガラハットさんに現場の指揮を任せると、僕は皆んなのもとに戻る。サマンドール側に入り込んだ魔物の討伐もそれほど時間はかからないだろう。サマンドール王国にも兵士や冒険者はいるはずだから。

旧シドニア側に足を踏み入れると、そこここに逃げ遅れた人の死体が転がっている。
その状況に僕達は絶句する。
「……酷いわね」
「可哀想ニャ」
特にシドニアで一時期暮らしていたアカネと、奴隷ではあったもののシドニア神皇国で生まれ育ったルルちゃんは、僕以上に思うところがあるみたいだ。
サンダーボルトで広範囲を攻撃した事により、周辺の魔物はほぼ全滅しているが、シドニア方面からはまだまだ押し寄せてくるのを、僕と従魔のカエデは察知していた。
僕は亜空間からゴーレムのタイタンとグレートドラゴンホースのツバキを出す。

「タイタン、ツバキ、無理しないようにね」
『オマカセクダサイ』
『お任せください』
続いてソフィア、アカネ、レーヴァがそれぞれの従魔を呼び出す。
「グローム」
「フェリル」
「セル」
グロームは雷の魔法を使うサンダーイーグルという猛禽類系の魔物。
フェリルはルナウルフという闇属性の狼系魔物。
セルがセルヴァルという巨大な猫系の魔物だ。
グロームが雷を纏い上空を旋回し、フェリルが影から影へと移動し、巨大な猫のセルがしなやかな動きでレーヴァに寄り添う。
「タクミ、まず広範囲に聖域結界を使った方がいいんじゃない」
「確かに、瘴気による穢れが気になるね」
アカネの指摘通り、大量の魔物による穢れが、亡くなった人をアンデッドに変えるかもしれない。
火属性魔法で燃やしてもいいのだけど、一度に広範囲となると聖域結界が良いだろうな。
「じゃあソフィアとアカネは、効果範囲を拡げる魔法をお願い」
「分かりました」

「分かったわ」
精神を集中して魔力を練り込み、聖域結界を発動する。
「聖域結界！」
僕を中心に温かな光が拡がって周辺を浄化する。
ソフィアとアカネが、魔法の効果をアップさせるバフをかける事により、聖域結界の光がさらに拡がっていく。
忙しく動き回る聖域騎士団や聖域魔法師団の団員が、思わず立ち止まってその光景に見入り、ガラハットさんが怒鳴る声が聞こえる。
聖域結界の光は、直径一キロを超えた。
「ふぅ、これで周辺の穢れは大丈夫だと思う」
亡くなった人の死体は残されているが、それがアンデッドと化す事はないだろう。
「お疲れ様です」
「ありがとう」
ソフィアがマナポーションを手渡してくれた。
まだ魔力的に余裕はあるが、念のため僕はそれを飲み干す。
これから長丁場だからね。
「タクミ、遠くに見える魔物の動きが鈍ってない？」
「ん？　本当だね。もしかしてこいつら光属性に弱いのか」

アカネが押し寄せて来る魔物の動きを指摘する。
中には、そのまま崩れ落ちるものもいた。
こんな事、よほど闇に傾いた魔物でないと有り得ない。
「タクミ様、以前使った魔導具は使えないのですか？」
「使えるけど、例の如くポイントに設置しないといけないよ」
ソフィアが言う以前使った魔導具とは、トリアリア王国と旧シドニア神皇国の合同軍とバーキラ王国、ロマリア王国、ユグル王国の同盟三国が聖域近くの未開地で戦争した時に使ったもの。
広範囲に聖域結界を発動させるアイテムだ。
あの時は、対アンデッド用として使ったのだけど、今回の黒い魔物達もアンデッド並みに光属性に弱い可能性が高い。
「タクミ様、レーヴァに任せるであります！　ドラゴンフライなら、あっという間であります！」
「じゃあ、逆回りで私がウラノスで設置するわ」
「ルルもお手伝いするニャ」
レーヴァと、アカネ、ルルちゃんが魔導具の設置を請け負ってくれた。
この魔導具は、五芒星の頂点に設置して起動する必要がある。
小国とはいえ旧シドニアをカバーするとなると、発動するための魔力の問題があるけど、それを解決する方法はある。
「じゃあ頼もうかな。僕達はこの付近で魔物を殲滅しているから、設置後ここで合流しよう」

「了解であります！」
「じゃあウラノスをお願い」
僕がレーヴァに魔導具を三つ渡すと、彼女は早速ドラゴンフライへと駆け出した。アカネにも一つ渡しつつ、ウラノスをアイテムボックスから取り出す。
アカネは魔導具を受け取ると、ルルちゃんとウラノスに乗り込み、飛び立った。
僕も起点となるこの場所に魔導具を設置する。
「それで、魔力の問題はどうするのですか？」
広範囲への魔法発動を心配したソフィアが聞いてきた。
「ああ、これを使うよ」
僕は地面を土魔法で成形し、そこにアイテムボックスから取り出した巨大な魔晶石を置いた。
「なっ、こんな大きな魔晶石をいつの間に」
「ハハッ、また何か造る時に使えないかと思ってね」
ソフィアが驚くのも仕方ない。
巨大な戦艦のオケアノスやガルーダを動かすために使用した魔晶石よりも遥かに大きいのだから。
何か大掛かりなものを製作する時に使えないかと作っておいたんだ。
「これでも外側は聖域結界（サンクチュアリフィールド）の効果が弱くなるだろうけど、あの魔物に効果はあると思う」
流石（さすが）に小国まるごと範囲に入れた魔法なので、中心付近と比べて外側の効果が若干弱くなるのは避けられない。

それでも亡（む）くなった人達がアンデッドになるのを防げるだろう。無惨（むざん）な死を迎えた後もアンデッドになって、魂を囚われるなんて酷すぎると思う。

3　騎士団無双

旧シドニア神皇国とロマリア王国との国境付近には、続々と戦力が集結しつつあった。
ロマリア王国の騎士団や魔法師団、冒険者に加え、同盟国のバーキラ王国の近衛騎士団とボルトン辺境伯家、ロックフォード伯爵家の戦力。それらが神速の行軍で、ロマリア国内に少数ながら入り込んだ魔物を討伐しつつ、ロマリア王国の騎士団が奮戦している旧シドニアの国境へと合流を果たした。
「避難者を誘導！　ポーションで回復を！」
ガラハットの息子で現バーキラ王国近衛騎士団団長ギルフォードが大声で指示を出す。
バーキラ王国の近衛騎士団、国王派貴族家の騎士団のポーション保有数は潤沢（じゅんたく）だった。
これは普段からタクミやレーヴァがパペック商会を通して比較的安価で販売しているのに加え、聖域から素材となる薬草類を購入して、国内の薬師や錬金術師（れんきんじゅつ）による生産を順調に進めている事が理由だった。
騎士団や魔法師団に回復魔法の使い手はいるが、数が少ないため大小様々な怪我をした大量の避

難者に対応出来ない。
それ故にポーションを大量に持ってきている。
そのポーションを惜しげもなく逃げてきた怪我人に使えるのは、騎士団が魔物に無双状態だからこそだろう。
「はっ！」
「どりゃ！」
「押し返せぇー！」
ハルバードの一振り、剣の一振りで魔物を葬(ほうむ)り、盾で殴りつける。
ロマリア王国の近衛騎士団も負けていない。
まるで競い合うかのように魔物を殲滅していく。
「……俺は夢でも見ているのか」
ただ、シドニアとの国境を領地とするロマリア王国の貴族家の騎士達は、その光景を信じられないでいた。
「これが俺達と同じ騎士だと言うのか」
バーキラ王国では、近衛騎士団だけじゃなく、国王派の貴族家の騎士団が聖域騎士団との合同訓練に参加していたが、流石にロマリア王国からは、近衛騎士団だけだった。
それにバーキラ王国の近衛騎士団や国王派貴族の騎士団の装備は聖域から購入したものだ。その性能はロマリア王国の辺境を護る騎士達とは比べものにならない。

その騎士団の圧倒的な実力だけじゃなく、馬もなく走る馬車よりもはるかに大きい鉄の箱――陸戦艇サラマンダーの存在にも驚いていた。
当初、自分達だけでは支えきれないと、悲壮な覚悟で魔物を押し込めていたが、陸戦艇に乗ったロマリアの近衛騎士団が到着してから、戦況は劇的に好転した。
さらに同盟国バーキラ王国からの援軍が到着すると、その圧倒的な戦力で前線を押し上げ始めている。
「俺達も負けていられるかぁ！」
自分達の領地は自分達で守るんだと、辺境の騎士達は気合いを入れる。
「おい、おい、何だアレ。凄(すご)えじゃねぇか」
「誰も彼もデタラメに強え」
ロマリア王国で活動する冒険者も、緊急依頼で集まっていたが、ロマリア王国近衛騎士団とバーキラ王国近衛騎士団及び国王派貴族家の騎士団の圧倒的な力に驚いている。
「盾を並べよぉ！」
「「「オウ！」」」
ドンッ‼
密度の高い魔物の群れに対し、ロマリア王国の騎士団が小隊長の号令で密集陣形で盾を並べ、息の合ったシールドバッシュを繰り出すと、魔物の塊(かたまり)は粉砕されはね返される。
「十歩前へ進め！」

「「「オウ！」」」
騎士団は魔物を蹴散らし前へと進み、前線を押し上げる。
「仲間と避難者に当てるなよ！　狙い定め……撃てぇ！」
今度は陸戦艇サラマンダーの上に陣取った魔法師団が、迫り来る魔物の敵影が濃い場所へ魔法を放つ。
味方や逃げてくる人達に被害が及ばない、適切な威力の魔法を選択して放ち続ける魔法師団。魔物を押し込み前進する騎士団との連携で、周辺の魔物は急速に数を減らしていく。

前線では、魔物を蹴散らしていた部隊が後続の部隊とスイッチする。
いくらレベルが上がって身体能力が高くなったとはいえ、ずっと戦い続ければ精神的にも肉体的にも疲労してしまう。
そのため、適度な間隔で前線で暴れる部隊が交代していく。
交代した部隊は少しの休憩の後、後方支援を行い、そしてまた前線へと向かう。
この一定の時間でローテーションしていく方法を見た冒険者や他の騎士団も次第に真似をし始め、一層安定して戦えるようになっていく。
「無理をするなよ！　まだまだ先は長い！　確実に数を減らす事を徹底しろ！」
地元の騎士団や冒険者をフォローしながら、着実に魔物を殲滅するロマリア王国近衛騎士団とバーキラ王国からの援軍。

そのお陰もあって、地元の騎士団や冒険者も何とか崩れず、やがて有利に戦闘を進め始める。
「一部隊は、遊撃で散らばった魔物の殲滅を！　ロマリアの騎士団と連携するんだ！」
「はっ！」
ギルフォードの指示で、精鋭の小隊が遊撃に回り始めると、ロマリアとシドニアとの国境付近での戦いは終息し始める。
溢れ出した魔物も無限ではない。
溜め込まれた悪意はやがて勢いをなくしていった。
ただ、この場にいる誰もの顔に安堵の笑顔はない。
前線を押し上げ、シドニア中心部へと少し進んだだけで、目を覆いたくなる惨状が広がっていた。

4　大陸の中心に降り注ぐ光

一見優位に戦いを進めているロマリア王国とバーキラ王国の連合軍だが、その反面、指揮官達の表情は険しい。
今まで殲滅してきた魔物は、数は多いが言ってみれば前座のようなものだ。
斥候から上がってくる報せには、強力な個体が進行中との情報があった。
今なら竜種でも倒せる自信はあるが、自分達以外の地元の貴族家の騎士団や冒険者には、大きな

被害が出るだろう。
「あ、あれは……」
「おお！　あれは、イルマ殿か！」
旧シドニア神皇国全土を覆うように、光の柱が天へと立ち上がる。
ギルフォードやバーキラ王国の騎士達とロマリアの騎士達は、この光に見覚えがあった。
未開地でのトリアリア王国とシドニア神皇国対バーキラ王国、ロマリア王国、ユグル王国の三ヶ国同盟との戦争時に同じ光を見ている。
しかし、今目の前の光景は、以前とは比べものにならないほど大規模だった。
「ギルフォード殿、魔物の動きが鈍っていますぞ！」
「ああ。これでアンデッドの発生を心配せずに済む。何より、冒険者達の被害を減らせる」
溢れ出た魔物が悉く聖なる光に弱点を持つ事に、ギルフォードはその歪さを改めて感じる。魔物の大半は獰猛で人間を襲うものだが、臆病な魔物や比較的穏やかな魔物、知能の高い魔物も存在する。苦手にする属性も様々なのが普通だ。
それが例外なく光属性を弱点にするなど、この魔物達が作為的に造られたと言っているようなものだ。
通常のスタンピードとは明らかに違う。
「前線を押し上げるぞ！　隊列を組み直せ！　食事を交代で摂り次第、攻勢をかけるぞ！」
「「「オオォォーー!!」」」

バーキラ王国とロマリア王国の連合軍が、本格的にシドニア側へと行軍を始める。
ギルフォードは、この魔物の氾濫に違和感を覚えながら、陸戦艇サラマンダーに乗り込んだ。

◇

サマンドール王国の国境付近は酷い被害だった。
サンダーボルトによる強襲により、滑走路を確保してガルーダが着陸、陸戦艇サラマンダーと聖域騎士団、聖域魔法師団の活躍で、国境付近での魔物との戦闘は落ち着いた。
僕――タクミは、全ての魔物が光属性魔法に弱点を持つ事が分かると、皆んなと手分けして準備に取り掛かった。
レーヴァが地図を持ち、ドラゴンフライを全速力で予定地点へと向かわせる。
ウラノスよりもさらに高速飛行が可能なドラゴンフライなら、大陸中央部に位置してはいても、国土面積が最も小さな国だった旧シドニア神皇国を一周するのに時間はかからない。
同じく反対周りから魔導具を設置するウラノスのアカネとルルちゃんも、直ぐに戻ってくるだろう。
僕が巨大な魔晶石と結界の魔導具を接続し、設置していると、あっという間にドラゴンフライが帰ってきた。

遅れる事十数分、ウラノスも戻る。
「タクミ！　魔導具は設置してきたわよ！」
「レーヴァもバッチリであります！」
「ありがとう！　じゃあ、早速発動させるね。ソフィア、アカネ、術式の強化をお願い」
「分かりました」
「任せて」
ドラゴンフライもウラノスも、離着陸に滑走路を必要としないので、僕の側に着陸すると、僕は二機をアイテムボックスへと収納。
早速聖域結界（サンクチュアリフィールド）を発動する。
「聖域結界（サンクチュアリフィールド）！」
魔導具が術式を強化、拡大し、さらにソフィアとアカネのバフのお陰で、小さいとはいえ国である旧シドニア神皇国全土を光の柱が包み込む。
「「「オオォォォォーー!!」」」
聖域結界（サンクチュアリフィールド）を初めて見たサマンドールの騎士や、冒険者達が、キラキラとした光の柱に歓声を上げた。
「やったわ！　魔物の動きが鈍ってる！」
「魔物によっては動きを止めていますね」
アカネが喜び、ソフィアもシドニア側の魔物の状態を察知する。

「ソフィア、ガラハットさんに連絡」
「攻勢をかけるのですね」
「ああ、サマンドールの騎士団と集まっている冒険者にも頼むよ」
「了解しました」
続いて僕はマリアの方を向く。
「マリアはギルフォードさんに連絡をお願い」
「分かりました！」
ソフィアがガラハットさんへの連絡に走り、マリアは通信の魔導具を使ってギルフォードさんと攻勢のタイミングを相談する。
その後、僅かに存在するサマンドールの騎士団と、緊急依頼で集まった冒険者にも話をしてもらう。
巨大な魔晶石があるので、聖域結界（サンクチュアリフィールド）の効果が直ぐに切れるわけじゃないが、それでも何日も持つものじゃない。
出来ればコッチの有利な状態で攻め込みたい。
やがてギルフォードさんと連絡がつき、一時間後に、魔物が湧き出した原因と思われる地を目指し、行軍を開始する事に決まった。
それまでの短い時間だけど、周辺の怪我人の治療や逃げ遅れた人の救助をする。

魔物の殲滅は、タイタンやツバキ、カエデや他の従魔達が活躍している。
時間が近づいてきて、僕も聖剣ヴァジュラと聖剣フドウを腰に装備した。
敵が光属性を弱点とするなら、この二振りがベストだろう。
「ガラハットさん、号令をお願いします」
「承知した」
ガラハットさんが聖域騎士団と魔法師団に、大声で進軍を叫ぶ。
「聖域騎士団！　魔法師団！　進軍!!」
陸戦艇サラマンダー、強襲揚陸艇サンダーボルトがシドニアへ向け出発する。
僕達もウラノスを取り出して乗り込むと、飛び立った。

5　バールの願いと部下の野望

大陸に大きな被害を与えている黒い魔物の氾濫。だが、その結果に唸る二人の魔人がいた。
予め用意した魔物のストックが心許ないと、元神官のアガレスと元代官のブエルが焦りを顔に表す。
このゴーストタウンを起点に、旧シドニア神皇国の国内の戦況は想定通りに推移した。
ところがロマリア王国とサマンドール王国は、アガレスとブエルが考える当初の予定を大きく下

回る被害状況だ。
本来ならば、放出した大量の魔物により、大陸全土が大混乱を起こしているはずだった。それが被害はほぼシドニアに留まっている。
「何故じゃ、ロマリアの騎士団はあれほど精強だったか？」
「騎士の精強さもだが、部隊の展開があれほど早いのは何故だ？」
アガレスとブエルは送り出した魔物の何匹かと感覚を繋ぎ、ある程度の戦況を把握していた。
ただ、魔物の知能が低いせいで、正確な情報を受け取る事が出来ていない。自然に進化して強くなった魔物とは違い、邪精霊由来の力を使い強引に能力を引き上げられた魔物達は、強くなっても知能は低いままだった。
そんな魔物を介して得る曖昧な情報からでさえ、ロマリア王国内には大きな被害が出ていないと分かる。
「サマンドール王国方面は国境を越えて侵攻出来ているのは分かるが、それも今はほぼ駆逐されている」
「それにドワーフ共も案外頑張りおるわ」
ブエルとアガレスが言う。
サマンドール王国方面に向かった魔物は、国境を越え大きな被害を与え、一定の戦果は得られた。
しかし、山脈に隔てられ地理的に守りやすいノムストル王国方面へは、二人の当初の想定通り侵攻を食い止められていた。

「トリアリアは軍事国家を謳う割に、国内への侵攻を許しておるな」
「どちらにせよ、想定外としか言えんな」
第一波は、数だけは多いが強さはそれほどでもない魔物だ。だが強くないとはいえ、それは第二波、第三波と用意している魔物と比べてであって、アガレスとブエルが調整し強化した魔物には変わらない。
予定では、ロマリア、トリアリア、サマンドールの国内全土を血に染め、バーキラ王国にまで迫るはずだったのだ。
「まぁ、第二波の魔物は、そう簡単に倒せまい」
「既に第三波も移動を始めている。これで溜め込んだ瘴気と魔力はすっからかんだ」
数を揃えるよりも、厄災級の魔物を数体創り出した方が良かったのでは？　と考えるも頭を横に振るアガレス。
そこで、そろそろ我慢の限界とばかりに馬頭のガミジンが二人に話しかけた。
「なぁ、いつになったら俺は暴れられるんだぁ」
「魔物に蹂躙され、疲弊したロマリア王国とサマンドール王国に侵攻すると言ってあっただろう」
ブエルが面倒そうにガミジンに言う。
そう、今回の標的は、ロマリア王国とサマンドール王国だった。
ノムストル王国に大きな被害を与えるのは、地形的に難しいと最初から思っていた。トリアリア王国に関しては、人族と魔人という差はあるが、その有り様に何処か似たものがあると感じていたので、魔物での侵攻だけで済ませた。
「この調子ならサマンドール王国に絞った方がいいか」
「うむ、そうじゃのう」
ブエルとアガレスが方針を変更する相談をするも、ガミジンは勝手な事を言い出す。
「なら俺はロマリアへ行くぜ」
「おい、ガミジン！」
それを今まで黙って聞いていたマルパスが咎めた。
すると――
「いいじゃないか。ガミジンは魔人らしくていい」
「「バール様！」」
クスクスと可笑しそうに言った邪精霊の御子――バールに、アガレス達の声が揃う。
「よろしいのですか、バール様」
「ガッハッハッハッ、流石バール様だぜ！」
ブエルが確認するも、バールはニコニコしながら頷くだけ。ガミジンは豪快に笑ってバールを讃える。
その時だった。光がその場を埋め尽くし、アガレス、ブエル、ガミジン、マルパスが呻き声を上げた。
「こ、これは……」

「グッ、クゥ……」
「な、何なんだぁ！」
「バ、バール様！」
体を襲う不快感と倦怠感、頭痛や吐き気……魔人になって初めての事態に彼らは困惑する。
「落ち着くんだ。これは光属性の大規模結界だ」
「光の結界ですとぉ!?」
「これほど大規模な魔法とは……」
「フフッ、大の男が揃いも揃って情けないわね」
バールが面白そうにアガレス達を見て言うと、アガレスとブエルの顔が驚愕に染まる。
その顔を見て、馬鹿にしたようにからかうのは、今まで一言も喋らなかった元娼婦のグレモリーだ。
「これほどの魔法を誰が……」
考え込むブエルに、バールが言う。
「アガレスやブエルは知っているはずだ」
「はっ！　まさかヤツですか！」
それを聞いてアガレスは一人の青年の存在にたどり着いた。
魔人となって、人間だった頃の記憶も随分と曖昧になっていた弊害だろう。自分達にとって、一番の障害となり得る存在を、今の今まで忘れていたのだから。

「心配しなくても、向こうがここまで来る。それにこの結界をいくらかなら抑えられると思う。このままじゃ消耗するばかりだしな」
「バール様……」
「フフッ、ちょうど良かった。彼を倒せれば、人類に大打撃を与えるのと同じよ。精霊樹の守護者なのだから」
「ガッハッハッハッ！　面白えぇ！　強ぇヤツが、向こうから来るなんて、願ってもねぇじゃねぇか！」
「そうか、そうだな。我も直接対峙していないが、勇者殿を倒した存在と闘えるのか……」
ガミジンは楽しそうに言い、マルパスも闘志をみなぎらせる。
ただアガレスとブエルの懸念はなくならない。
これほど大掛かりな光の結界を抑え込むとバールは言うが、それが簡単ではないと二人には分かるから。
魔人により反応が真っ二つに分かれるのを見ながら、バールは結界を抑え込む作業に入る。

6　そこは地獄だった

ガラハットさんと打ち合わせして、僕――タクミは聖域騎士団と旧シドニア神皇国の中央部に足

を踏み入れた。
強襲揚陸艇サンダーボルトにより拠点と滑走路を建設したのは、シドニアの国境を越えている場所だ。
流石にバーキラ王国の同盟国でもないサマンドール王国にはみ出ると、あとで問題になりそうだからね。
サマンドール王国は、聖域とも関係は薄いし。
聖域騎士団の一部隊をガルーダの護衛に、もう一部隊を聖域結界維持のための魔導具の守備に残している。巨大な魔晶石のお陰で、結界の発動時間が伸びているからね。あれを守るのは重要な任務なんだ。まあ、結界も張ってあるから手を出そうとしても普通は無理なんだけど。
冒険者も高ランクの腕利き達は、シドニア側で魔物の討伐にあたるようだ。聖域結界のお陰で、弱体化した魔物や動けなくなった魔物を中心に討伐してくれる。
とはいえ、光属性を弱点としながらも結界の中で生きているというだけで、この黒い魔物達が尋常じゃないと分かる。
腕利きの冒険者以外、駆け出しから中堅の冒険者達は、死体の埋葬と前線で討ち漏らした少数の魔物を始末するらしい。
まあ、前線を抜けてくる事はほとんどないだろうけどね。
「何て酷い事を……」
「酷いわね」

人魚族のフルーナと有翼人族のベールクトが、旧シドニア神皇国の惨状を目にして顔を青くしている。
フルーナやベールクトは、これだけ多くの人が無惨に死んでいる光景を見るのは初めてなので仕方ない。
僕だってこみ上げる怒りを抑えるのが難しい。
戦争で兵士が死ぬのを見るのと、争いに関係のない人達が巻き込まれて無惨な死体を晒しているのを見るのは、全然意味が違うしね。
「フルーナさん、ベールクト、大丈夫？　きつかったら後方支援の方に回ってもいいんだよ」
「タクミ様！　どうして『さん』付けなんですか！　前に呼び捨てでって言ったじゃないですか！」
「えっ、そっち⁉」
「そうよね。付き合いの長さじゃ私よりフルーナの方が長いんだから、さん付けは嫌よね」
顔色の悪い二人を気遣ったつもりが、何故か呼び方で怒られた。
「ほら、タクミ様、フルーナって呼んであげて」
「い、いや」
ソフィアに助けを求めようと見ると、彼女は首を横に振っている。
そんな場合じゃないと思う僕は間違っていないはずなんだけど、諦めて呼んでみる。
「フ、フルーナ」
「はい！」

「はぁ……」
僕がフルーナとさんを付けずに呼ぶと、満面の笑みで返事するフルーナ。
こんなやり取りしている場合じゃないのにね。まあ、フルーナやベールクトがトラウマになるような事がなくてよかったよ。
気を取り直して聖域騎士団と魔法師団はガラハットさんに任せ、僕達は自由に動かせてもらう。
騎士団の陸戦艇サラマンダー二台が地上から、サンダーボルト二機が空から魔物の掃討をする。
そうやって制圧地域を増やしていくんだ。

僕達は、ウラノスに乗り込み、空から強そうな魔物を駆除していく。強力な魔物は聖域結界（サンクチュアリフィールド）で動きが阻害されていても中堅の冒険者では危険だ。
「ギルフォードさんから通信が入って、バーキラ王国とロマリア王国の騎士団と冒険者も、シドニア側に侵攻して掃討に入ったみたいだね」
「では、私達はノムストル王国側の魔物とトリアリア王国側へと向かう魔物を間引きますか？」
「そうだね。僕達はシドニアの国内を外側からグルグルと回って円を縮める感じで行こう」
「はい」
ソフィアと話して魔物の討伐については目処がついた。
トリアリア王国に関しては、先の戦争の事もあって色々と思うところはあるんだけど、それでも一般の人達が被害に遭うのは避けたいからね。

トリアリア王国国境付近には近寄れないので、それよりも内側での掃討になる。まあ、軍事国家なんだからあとは自分達で何とかするだろう。
「あっ！　タクミ様、ストップ！」
聖域結界（サンクチュアリフィールド）により動きが鈍くなった魔物や、既に動けなくなった魔物にウラノスでトドメを刺しながら飛んでいると、マリアが叫んだ。
「!!　緊急着陸する！　アカネは救助した人の治療を！」
「分かったわ！」
マリアが指差していたのは、必死で逃げる大人の男女二人と、まだ小さな子供二人。大人の女性は赤ちゃんを腕に抱いていた。
そしてその後ろを魔物の群れが追っている。
ウラノスから魔物だけに当たるように法撃を加え、緊急着陸する。
ウラノスが着陸すると、ハッチが開いた瞬間ベールクトが空を飛び、逃げてくる人と魔物との間に降り立つ。
「ここから先へは通さないわよ！」
ベールクトは手に持つガンランスロッドから風属性魔法を放ち、迫り来る魔物を切り裂く。
結晶化した竜の牙で造られた槍（やり）の穂先から、増幅された風の魔法が撃ち出される。
もともと風属性の魔法に高い適性を持つ有翼人族だけあり、強力な風の魔法が襲い来る魔物を蹂躙する。

それに合わせるかのように、炎の魔法が撃ち出された。
マリアの焔槍――爆炎槍（エクスプロード）による攻撃だ。
「私も！」
そう言ってフルーナが放った水の刃が乱舞する。
フルーナの鎌槍には、水属性魔法を強化する魔晶石が使われている。それにより強化された水属性魔法が魔物を切り裂く。
フルーナは人魚族だけあり、水属性に高い適性を持つ。そのフルーナの放つ水の刃は硬い魔物を容易く真っ二つにした。
操縦をレーヴァに任せ、僕とソフィアもウラノスから飛び出すと、亜空間からカエデも出てきて周辺の魔物を瞬殺した。
振り向くと、アカネとルルちゃんが逃げていた人を保護していた。
「カエデ、生き残っている人がいないか、周辺の探索をお願い」
「はーい！　マスター！」
カエデが手を上げて返事をすると、亜空間から出てきたツバキに乗って駆け出した。
改めて周囲を見回すと、既にこと切れた人達の死体が其処（そこ）ここに打ち捨てられている。
この世の地獄としか言えない光景に、僕は再び言葉を失った。

7　生き残った人を助けよう

助けたのは若い夫婦と、赤ちゃんを含む子供三人の計五人だった。
アカネの回復魔法で治療され、ルルちゃんから食べる物と水を渡され、二人の子供は夢中になって食べている。
その時、ユグル王国からの援軍がロマリア王国のシドニア側の国境に到着したと連絡が入った。
ユグル王国の騎士団は、そこで後方支援を中心に、一部隊がシドニア側で生存者の探索と保護にあたるそうだ。
瓦礫（がれき）の下敷きになっても生きている人もいるだろう。
そんな人達を一人でも多く救う重要な役割を担う。
そこで僕もガラハットさんと、ロマリア王国方面から進行しているギルフォードさんと連絡を取り、その二つの騎士団からも生存者の探索部隊を派遣してもらうよう要請した。
『こちらも生存者を数名発見しましたぞ。いっそガルーダをもう少し動かしますか？』
「ガルーダは必要ないでしょう。残念ですけど、サンダーボルト二機とサラマンダー二台でも十分だと思います」
ガラハットさんの言葉に僕はそう答えた。

ガルーダを動かすほど生存者の数は多くないだろう。
『こちらギルフォード、こちらはロマリア国境付近の貴族家の騎士や冒険者が避難民の保護と生存者の探索に移ります。我らとロマリア近衛騎士団はこのままシドニア内部での魔物討伐にあたります。それとユグル王国からも援軍が到着するようですので、遺体の埋葬と生存確認をお願いしようと思っています』
「そちらは問題なさそうですね。何かありましたら連絡してください」
『了解です』
『了解じゃ』
通信を終えて僕達もサマンドール方面から、魔物が溢れた方向へと移動を開始する。
ただ、生存者探索をしながらなので、先ほどとは違いグッとスピードは遅くなるが、ガラハットさんやギルフォードさん達と歩調を合わせるなら仕方ない。
その後、何人かを発見するも、魔物が溢れた原因であるだろう中心に近くなるにつれ、生存者は少なくなる。
「ヒドイ有様ですね」
「ああ、当たり前なんだろうけど、先へ進むほど死体の損壊も激しいね」
低空で飛ぶウラノスのコックピットから地上を見るソフィアの顔が歪む。
シドニア神皇国が崩壊後、シドニアの国民の多くが周辺国へと流民となって移動したけど、それ

でも残っていた住民も少なくない。
その旧シドニアに残っていた国民の半数以上が被害に遭ったんじゃないだろうか。
小さな国土で人口の流出があり、もともと人口が多くなかった所への被害だからなんて、何の慰めにもならない。
魔物が溢れ出したと想定される中心部へと近づくほど、地上には五体がまともな死体が少ない。
そんな死体が散乱する地獄絵図が広がっていた。
そのような状況でも、手や足を失いながら、あるいは瓦礫に埋もれながら生きていた人をガラハットさんやギルフォードさん達と手分けして救助しつつ、今回のスタンピードの原因であろう場所へと向かう。
そして、とうとうその場所を特定した。
「明らかに統率された魔物がいるね」
「場所が特定出来ましたので、ガラハット殿やギルフォード殿達と合流した方がいいのでは？」
「そうだね、ソフィア。救助した人達をまとめて移送してもらいたいしね」
救助した人達は、怪我人は治療して食べ物も与えたけど、彼らを連れたまま、この魔物の氾濫の原因となったモノと戦いたくない。
早速、ガラハットさんと連絡を取る。
「ガラハットさん、そちらの状況はどうですか？」
『こちらガラハット。生存者の探索は一応切り上げました。ウラノスと合流するために移動中で

すぞ』
「了解しました。ウラノスはこの場で待機します」
次にギルフォードさんに連絡する。
「こちらイルマです。ギルフォードさん、そちらの状況はどうですか？」
『こちらギルフォード。こちらも合流に向け、移動中です。父上より多少時間はかかりますが、一時間ほどで合流出来ると思います』
「了解です。目印にウラノスを空中に待機させてます。気を付けてください」
『了解です』
通信の魔導具を切ると、皆んなに指示を伝える。
「ガラハットさんとギルフォードさん達と合流するから、僕達はしばらくこのまま待機する。皆んなも今のうちに休憩しておいて」
「分かったわ。私とルルは救助した人達の様子を見てくるわね」
「お任せなのニャ」
「うん、お願い」
救助者の治療を担当していたアカネとルルちゃんが、再び救助者を収容している区画へと向かう。
「このあたりは聖域結界（サンクチュアリフィールド）の効果が薄いのでしょうか？」
「何者かが干渉しているんだろうね。完全に打ち消せてはないけど、たいしたものだね」
僕達が魔物が溢れた起点と特定した場所は、遠目にも聖域結界（サンクチュアリフィールド）の効果が薄いのが見て取れた。

これだけを考えても、今回の敵が油断していい相手ではない事が分かる。
僕とソフィアは、ウラノスのコックピットから、前方に見える聖域結界（サンクチュアリフィールド）の光が薄い場所を眺（なが）め続けていた。

8　集結

少し時間の余裕があったので、ウラノスでレーヴァが救助した人達を後方へと移送し、大急ぎで戻ってきたタイミングで、僕とガラハットさん達、聖域騎士団は合流した。
聖域騎士団が救助した人達も、サンダーボルトで後方へと移送されている。
「イルマ殿、あそこですな」
「はい、結界の効果が弱められているので、注意が必要ですね」
僕とガラハットさんが話していると、僕とは古い付き合いの聖域騎士団員――元「獅子の牙」のヒースさんが、ガラハットさんに報告に来た。
「団長、仮設拠点の設置完了しました」
「うむ、バーキラ王国とロマリア王国が合流するまで、哨戒任務の部隊以外は交代で休憩を取るように」
「了解です！」

ヒースさんはニコリと笑って僕に手を上げ、駆け足で行ってしまう。
聖域騎士団は、他の国の騎士団と比べると堅苦しくない組織だけど、流石に作戦行動中なので、知り合いとはいえ無駄話は出来ないからね。
ガラハットさんが僕に向き直る。
「サマンドール王国で活動する冒険者が、国境付近で避難民の救助と遺体の埋葬をしております。サマンドールの騎士や冒険者を戦力には数えられんので……」
「そうですね。結界内で動けなくなったり、動きが鈍くなったりした魔物の後始末なら大丈夫でしょうが、この先は足手まといでしかありませんからね」
周囲に魔境が少なく、魔物の脅威もあまりないサマンドール王国には、高ランクの冒険者はいない。
サマンドール王国の冒険者は、ある程度の実力になると、バーキラ王国かロマリア王国へ移動してしまうので、魔物討伐の主戦力となる冒険者が存在しないのだ。
サマンドール王国は、バカンスを過ごすには良い国なので、高ランク冒険者が休息で訪れていれば、緊急依頼を受けていただろうけど、今回はいないみたいだね。

「タクミ様、ギルフォード殿が到着しました」
「ありがとう、ソフィア」
「やっと来おったか」

「距離があるから仕方ないですよ」
テーブルと椅子を出してガラハットさんとお茶を飲んでいると、ソフィアがギルフォードさんの到着を報せてくれた。
ガラハットさんが不満そうに言うけど、距離が遠いんだから許してあげようよ。
「イルマ殿、父上、バーキラ王国近衛騎士団及び貴族連合騎士団、ただ今到着しました」
「ギルフォードさん、ご苦労様です」
「よし、打ち合わせをするぞ」
ガラハットさんが、早速攻勢に入るための打ち合わせを提案すると、ギルフォードさんが言う。
「はっ、ではロマリア王国の代表と、冒険者ギルドの代表を呼んでまいります」
「えっ！　冒険者ギルドから誰か来てるんですか？」
僕が首を傾げていると、やって来たのは、僕がよく知る人物だった。
「おう！　久しぶりだなタクミ」
「バラックさん！」
そこに現れたのは、スキンヘッドに強面の顔、年齢を感じさせない筋骨隆々な身体……僕の体術の師匠でもある、ボルトンの街にある冒険者ギルドのギルドマスター、バラックさんだった。
「どうしてバラックさんが？」
「危険な前線で指揮をとれるのが俺くらいだったんだよ」
話を聞くと、現在のバーキラ王国の冒険者ギルドのギルドマスターの中で、現役で前線に出られ

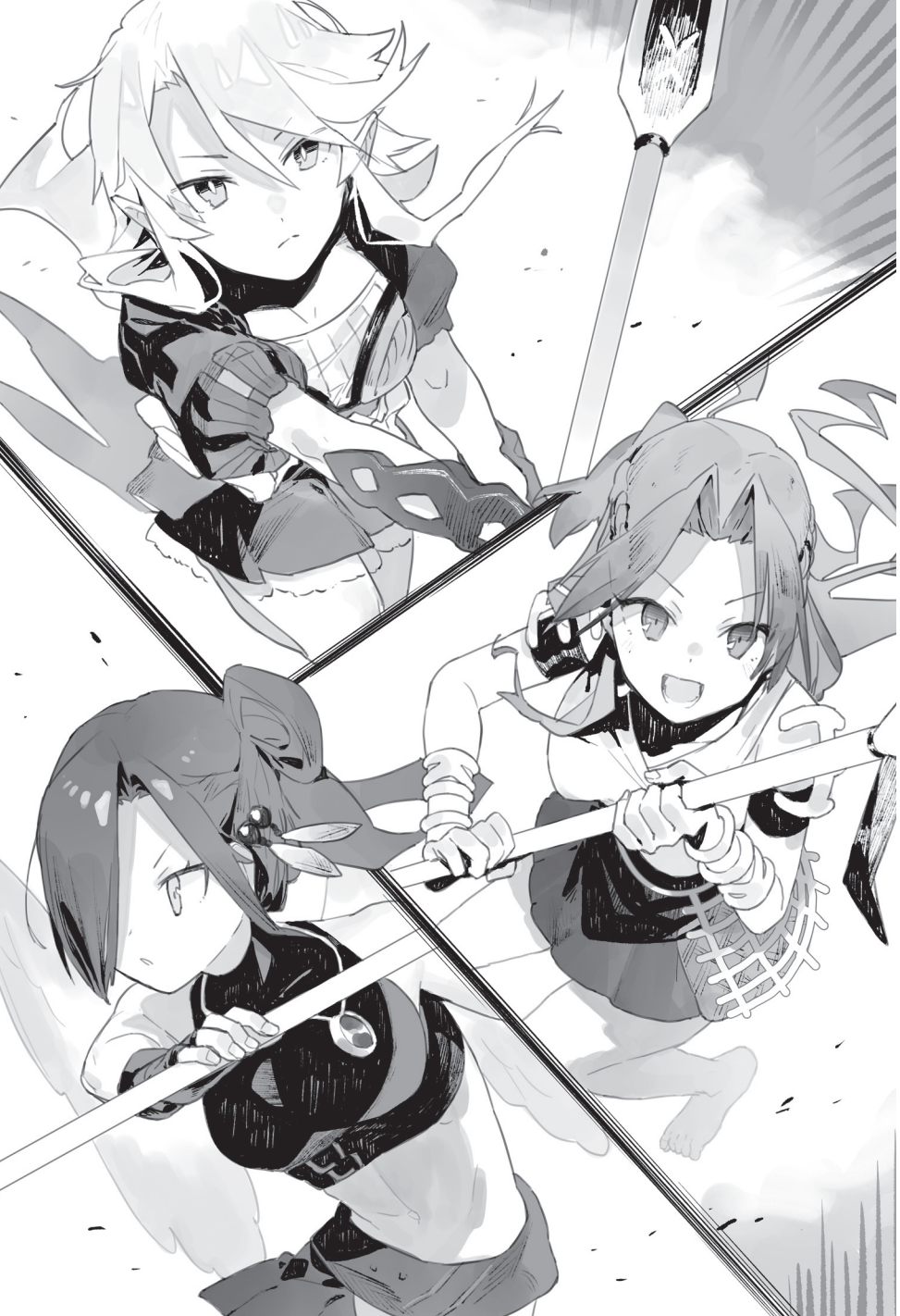
るのはバラックさんだけらしい。
他のギルドマスターは、内務系の人だったり、元冒険者だった人でも、もう年齢的に戦えなかったりするようだ。
「それにしてもバラックさん……フル装備ですよね？」
「うん？　当たり前じゃねぇか。まだまだ若い奴らには負けんぞ」
バラックさんが冒険者の指揮をとるために来たのは分かったけど、最前線で暴れていたのがひと目で分かるフル装備なのには呆れてしまう。
バラックさんは体術がメインなので、軽鎧と金属製のガントレットに似た籠手を装備している。多分、Sランク冒険者だった頃の物なんだろう。軽鎧は竜種の革をベースに、ミスリルで補強されている。ガントレットも魔法金属製で、これから繰り出される魔力撃がバラックさんの攻撃手段らしい。
バラックさんは、バーキラ王国の冒険者とロマリア王国からの冒険者の指揮をとるそう。
元Sランク冒険者という肩書きを持つバラックさんは、冒険者達に絶大な信頼を得ているみたいだ。
それにここまで来ている高ランクの冒険者のほとんどは、バラックさんを知っているしね。
最後にユグル王国の騎士団が合流し、いよいよ掃討作戦が始まる。

9　激突

僕達のパーティーと聖域騎士団、バーキラ王国騎士団、ロマリア王国騎士団、ユグル王国騎士団、高ランクの冒険者達の合流が完了し、簡単な打ち合わせの後、それぞれ布陣した。
本当はスタンピードの原因らしき場所を包囲した方がいいのだろうけど、こちらの数が少ない。被害を最小限にするための少数精鋭なので仕方ない。
僕達より先に、相手の方が動き出した。
四方に散らばるのではなく、明確に僕達の方を目指している事から、ある程度統率のとれた魔物なんだろう。
魔物が動き出したのを見て、ガラハットさんが大声で攻撃の指示を出した。
「各魔法師団！　撃てぇ！」
ガラハットさんの号令で一斉に魔法が放たれた。
各騎士団の陸戦艇やサンダーボルトも法撃をばら撒いている。
普通なら殲滅出来そうなくらいの密度で放たれた法撃だけど、魔物全てを駆逐するには及ばなかった。
それだけ強い個体なのか、または魔法耐性が高いのか、それとも他の理由があるのかは分から

ない。
それでも向かってくる魔物は最初の半数に減っている。
しかも残った魔物もボロボロで、聖域結界（サンクチュアリフィールド）の影響が強い範囲に足を踏み入れると、それだけで倒れるものもいた。
そんな時、突然魔法が障壁に阻まれる。
魔法障壁を張る魔物なんて聞いた事はない。
魔法を阻んだ存在がいる。
「ガラハットさん！」
「法撃を止め！　魔法師団、魔法使いは、当初の予定通りサポートに回れ！　騎士団、前進！」
僕達パーティーを含む騎士団と冒険者が前進し始めた時、強力な個体が近づくのを感知した。
「ガッハッハッハッ！　やっとこのガミジン様の出番だぜぇ！」
そこに現れたのは顔が馬で巨体の人らしきもの。
魔人だろうか。
普通に話しているという事は、単なる人型の魔物ではなく、今回の惨劇を起こした元凶の一人である可能性が高い。
ガミジンと名乗ったそいつは、背負っていた巨大な戦斧を取ると、猛然と駆け出した。
「タイタン！」
僕はタイタンの名を呼ぶ。

その巨体に似合わないスピードで迫るガミジンが振るった戦斧の一撃に、マギジェットスラスターを噴かし、割って入ったタイタンが大盾をぶつけた。
ガァキィィィィーーン!!
周辺にもの凄（すご）い激突音が響く。
「何だぁ!?　ゴーレム如きが俺様の斧を受け止めただとぉ」
斧を弾かれ、体勢を崩したガミジンが驚きの声を上げた。
ガミジンとしても渾身の力を込めた一撃だったんだろう。実際、タイタンじゃなければ受け止める事は出来なかったと思う。
「タクミ！　コイツは俺達が引き受ける！」
「お願いします！」
馬頭の人型、ガミジンの太い腕に魔力を纏ったガントレットの一撃が当たり、ガミジンの戦斧を持つ腕がはね上がる。
タイタンとガミジンの戦いに参戦したのは、バラックさんと彼が率いる高ランクの冒険者達だった。
数名の冒険者とバラックさんが、タイタンと連携するようにガミジンへ攻撃を加える。
即席だけどしっかり連携が取れているあたり、流石は高ランクの冒険者だ。踏んできた場数が違う。
騎士団と手負いの魔物との戦闘が始まり、ガミジンをタイタンとバラックさんに任せ、僕達は先



に進んだ。
しばらく行くと、馬頭の魔人ガミジンとは別の人型と相対した。
「ここから先へは通さん！　我はマルパス！　バール様の騎士なり！　通りたくば、我を倒して行け！」
半裸のガミジンとは違い、その巨体に金属製の騎士鎧を身に着けたマルパスと名乗る人型は、その言動から元は騎士だった事が窺える。
しかし今のその姿は人から大きく外れ、獅子の頭に四本の腕の人型のキメラだ。
ただ、そんなマルパスの相手は僕じゃない。
ガキィィンッ!!
僕の横をすり抜け、マルパスと斬り結んだのはソフィアだった。
「私がサポートします！」
「私も！」
フルーナの槍がマルパスの腕の一本を押さえ込むと、さらにベールクトの槍が突き出された。
「タクミ様、ここは私達にお任せください！」
「頼む！」
マルパスをソフィアとフルーナ、ベールクトの三人に任せ、僕は右手に聖剣ヴァジュラ、左手に聖剣フドウを持ち、魔物を倒しながら前へと進む。
ソフィア達なら大丈夫だろう。

さらに先に行くと、今度は巨大な火球と氷の塊が僕達を襲ってきた。
僕に向けられた魔法を、魔法障壁を展開して防ぐと、火球と氷の塊が飛んできた方向に視線を向ける。
そこにいたのは二人の人型。グレーに染まった肌の色を除けば、人間と変わらない容姿だけど、身に纏う魔力や瘴気が人間ではないと告げている。
「ほぉ、この程度は防ぐか。まあ、このくらいはしてくれぬとな。儂はブエル、バール様の忠実なしもべだ。主人に仇なす者は殲滅してくれるわ」
「ホッホッホ、それはそうじゃ。コヤツはシドニア崩壊の元凶じゃからな。儂の名はアガレス。女神アナト様、教皇ワイバール様、皇女エリザベス様の仇は取らせてもらう」
だいたい想像はしていたけど、アガレスと名乗った老人の言葉で、今回の惨劇を引き起こしたのは、邪精霊と関わりのある奴らだと確定した。
「タクミ、このジジイは私に任せてちょうだい」
「ルルにお任せニャ！」
アガレスと名乗った老人の前に、アカネとルルちゃんが出る。
「じゃあ、このオッサンはレーヴァにお任せなのであります！」
「タクミ様、レーヴァのサポートは私に任せてください」
「頼んだよ、マーニ」

ブエルと名乗った男は、レーヴァとマーニが引き受けてくれた。
僕はその場を皆んなに任せ、立ち塞がる魔物を二本の剣で薙ぎ倒しながら、マリアと共に事の元凶がいるであろう場所へと駆け出した。

10　タイタン&バラックvsガミジン

三メートル半ばほどあるアダマンタイト合金製のガーディアンゴーレムのタイタンと、二メートル半ばの馬頭の魔人ガミジンの巨体が激しくぶつかった。
「狙いを絞らせるなぁ！　タンク役はタクミのゴーレムに任せるんだぁ！」
「「「おう！」」」
ボルトンの街の冒険者ギルドマスターで、元Sランク冒険者のバラックが冒険者達に指示を出す。
タイタンは巨体だが鈍重なわけではない。普通のゴーレムとは比べものにならないくらい機敏に動く。
タクミ特製のアダマンタイト合金ボディに、Sランク以上と言われるガーディアンゴーレムのコアを持ち、自ら思考する特別なゴーレムだ。
タイタンは盾術のみならず棍術や体術を使いこなし、大型の魔晶石を複数組み込まれているためパワーとスタミナも規格外。

そのタイタンが、ガミジンの戦斧の攻撃を時に捌き、時に正面から受け止めていた。
ただ、そんな規格外なゴーレムであるタイタンとまともにやりあえている事実を見ると、ガミジンの膂力も尋常じゃない事が分かる。
「チッ、硬えなぁ、おい！」
バラックが魔力撃を叩き込むも、ガミジンの硬さは尋常じゃなかった。
「ギルマス！　前に出過ぎるなよ！」
「そうだぜぇ！　もう、歳なんだからなぁ！」
「五月蠅ええぇ！　まだまだお前らには負けねぇよ！」
ガミジンの黒く染まった体は、まるでオーガの上位種をさらに強化したように強靭で、しかも小さな傷など瞬く間に治ってしまう。
バラックが舌打ちするのも分かる。
その強靭な巨体が軽々と振るう重量級の戦斧の斬撃の嵐は、掠っただけでも無事では済まないだろう。
ガミジンは味方のはずの黒い魔物を巻き込む事を厭わず、暴風のように戦斧を振り回す。
実際、周囲の魔物が巻き込まれミンチになっているが、ガミジンが気にする様子はない。
ガミジンに魔物への仲間意識などない。
バールに対しては一応の忠誠心はあるようだが、マルパス達へは疑わしいところだ。
そんなガミジンの周囲の黒い魔物ごと敵を粉砕しようとする攻撃が続く。

立ち読みサンプル
はここまで

それでもバラックは、格闘家らしいスピードを活かした攻撃でガミジンに的を絞らせない。
長年の戦いの中で培った経験は伊達ではない。ただ速いだけ。ただパワーがあるだけ。そんな攻撃を受けるバラックではない。
タイタンとバラックが前に出て、ガミジンの標的となっているその隙に、冒険者達が脚や腕を狙って攻撃を仕掛けては後方に下がる。
高ランクの冒険者とはいえ、ガミジンの攻撃をまともに受ければ死に繋がる。
だから彼らは無理はしない。
冒険者は生きて帰る事が一番重要だと知っているから。
「ガアァァーーッ‼　ちょこまかと、鬱陶しぃぃ！」
ブォォーーンッ‼
ただ強引に振り回された戦斧がめちゃくちゃに空気を切り裂く。
それでもバラックや冒険者達は戦斧を掻い潜り、チクチクと攻撃を加える。
そんな彼らの動きに焦れたのはガミジンだった。
ガミジンが、バラック達の動きに苛ついて乱暴に戦斧を振り回す。最早そこに技術などない。ただ力任せに振るうだけだ。
もともと人間だった頃は木樵で、冒険者をしていたわけではないガミジンは、戦闘の技術に関しては未熟だった。
しかも今の姿となってから、弱者相手に暴れて戦闘による高揚感を得る事はあっても、対人戦の